

## 新刊紹介

不破祐俊、板橋倫行兩氏譯

### 『婚姻の諸形式』

伊藤 久 秋

本書はミュラー・リヤーの原著 *Formen der Ehe, der Familie und der Verwandtschaft* の邦譯である。著者 Müller-Lyer の名は、社會學徒に對しては今更之を紹介する必要はない。既に其 *Phasen der Kultur* (文化の諸相) には邦譯(大正十年鼓常良氏譯)があつて、一般讀者も多少は既に知つてゐる事であらう。併しその獨創的な學問的頭腦を以て、なほ一生涯いづこの大學の講壇にも教鞭をふるゝことなかつた彼は、他の多くの人々に比して、知らるゝこと寧ろ少く、顧らるゝこと寧ろ薄きの感ないでもない。殊に經濟學者に至つては、ミュラー・リヤーが、その『文化の諸相』に展開する示唆に滿つる經濟發展階段の學說に對して紹介の言葉を用ふるゝことすら甚だ稀である。

ミュラー・リヤーは一八五七年二月五日南獨逸の有名なる溫泉地バーデン・バーデンに生れ、一八七六年、ストラスブルグ大學に學び、次いでボン及びライプチヒ大學に轉學して醫學を研究した。學を畢へるゝ共に(一八八〇年)ウーヘンに至つて、Meyner の講義を聞き、神經學、精神生理學、心理學に主力をそゝぎ、一八八一年にはストラスブルグの神經病院の助手となり多くの勞作を發表した。一八八三年より八七年まで伯林及び巴里に在つて研究に没頭し、一八八八年より彼の歿年たる一九一六年(十月二十九日)までミュンヘンにゐまつた。彼が社會學的研究に従事するに至つたのは、彼の三十三四歳の頃からであつて、數年間の不撓の努力によつて集めたる廣汎なる材料を基として、彼の獨創的な『人類發展の諸段階』は企てられたのである。不幸にして彼の死は此大計畫を中途にして挫折せしめ、十二卷の計畫の中七卷の發行を見るにゐまつた。今邦譯されたものは其第三卷に當るものである。

彼の學問傾向に關しては社會學の門外漢たる筆者の喋々すべきことではないが、今『婚姻の諸形式』の邦譯を紹介するに當つて、本書が彼の學問體系の中で如何なる役割を務めるものであるかに就て一言し

て置く必要があらう。

彼は獨逸人でありながら、その學問傾向は、コントの流れを汲む實證主義であつて、その進化論的立場に於て、コント、スベンサー、ミル等と接觸してゐる。彼によれば社會學の目的は、人類社會の發展を支配する諸法則を發見することであり、或は又、人類文化發展の合法性を究めることである、而て文化とは人類社會がその初めから物質上精神上の事物に於て、知識や才能に於て、風俗習慣に於て、又全業績や生活表現に於て自分のものにして來た全ての進歩と成果との總和であるから、彼の社會學の研究範圍は甚だ廣汎なるものとなる。だから彼は自己の社會學の體系に『人類發展の諸段階』なる名稱を與へた。

彼の社會學研究の第一の職務は完全忠實なる事實の蒐集である。即ちあらゆる時と場所とに於ける人類の文化形態を蒐集し來る事が必要である。第二の職務は此事實資料全體を一定の方法で歸納的に加工する事であつて、此際動もすれば侵入し來る感情を屈服してその取扱は飽くまで客觀的でなくてはならない。この爲に著者が提唱する方法は自然科学に於ける比較研究法の應用たる『相關的研究法』die philosophische Methode である。此方法によれば文化の

全領域を若干の主要部分に分つ、その主たるものは、經濟、増殖、社會組織、言語、科學、宗教、倫理、法律、藝術であつて、各々の文化領域に於て個々の文化現象が最古の時代より現代に至るまでにこつた過程を追求して、之を相に分ける。これによつて文化現象の混沌の中から一の秩序が形成される、次に各文化領域に於ける各相は、その前後の相と比較せられ、その間に流るゝ所の、文化の進行する方向を示す顯著な線が見出される。この線が『文化進歩の方向線』である。そして此線の研究を深めるに、これに作用する原因即ち文化の驚異すべき建設を組立てる社會學的諸勢力の研究を以てする時、此方向線から方向律即ち文化運動が従ふ合法性の認識に到達が出来る。

著者が『人類發展の諸段階』として包容しようとした十二卷は次の表題を附するものである。

#### I. Der Sinn des Lebens

#### II. Phasen der Kultur

#### III. Formen der Ehe

#### IV. Die Familie

#### VI-IX Die Zähmung der Normen

#### IX. Soziologie des Alters

X. Der Staat

XI. Die Geschichte des menschlichen Verstandes

XII. Die Entwicklung der Moral, des Rechts sowie der Kunst.

第三卷即ち茲に不破板橋兩氏の翻譯になる『婚姻の諸形式』は第四及第五卷と共に彼の所謂増殖即ち人間の生産に關する總ての社會學的現象の總和——性的關係、婚姻、家族等——を取扱ふものであつて、彼は此文化領域に名付くるにゲネオノミーなる辭を以てしてゐる。

以上略説したる所によつて、ミユラー・リヤーの社會學大系が如何に大がかりなものであるかが判明するであらう。そしてそれがジンメルにより代表さるる獨逸學界に於ては全く畑違ひである所のコントの構造であることが明であらう。

『婚姻の諸形式』は左の内容より成る

第一章 緒論

文化は發展過程、抽象的文化科學——社會學 相關的方法、ゲネオノミー

第二章 ゲネオノミー全領域の分類

第三章 婚姻の諸形式

個々の動物類に於ける

人類に自然的な婚姻形式は一夫一婦婚なりこの假設

第一、亂婚 第二、集團婚、第三、多夫婚、第四、多妻婚、第五、一夫一婦婚

第四章 婚姻繼續の期間

婚姻繼續の期間の重要性

繼續期間なる着眼點より婚姻を三類に分ける

第一類 容易く離縁し得る婚姻

第二類 存続を法律に依りて保護されざる繼續婚姻

第三類 法律的強制によつて保護されたる繼續婚姻

第五章 婚姻の純潔

第六章 婚姻諸形式の定義及名稱

第七章 家族の諸形式

第八章 親族の諸形式

血族、氏族、トーテム制、文身、親族組織の高等なる諸形式、母權、父權、親權、フラトリ地域的結合

結論

第一章に於て著者は、文化の概念、社會學の定義、相關的方法、ゲネオノミーに關して簡潔なる説明を

與へ、第二章に於てゲネオノミー全領域の分類を掲げてゐる。彼によれば、ゲネオノミーの全領域は次の如く分類される。

イ、性關係——一、愛、二、婚姻、三、婚姻成立及

離婚、四、婦人の社會的地位

ロ、世代關係——一、家族、二、淘汰、三、教育、四、

相續、五、老人の社會的地位

ハ、親族關係——一、氏族、二、親族組織、三、婚姻

制度

第三章以下はゲネオノミー的形式の研究であつてイ、ロ、ハの諸關係に關する如何なる形式が、換言すれば『婚姻、家族及親族』の如何なる形式が實際に於て發現したるかを取扱ふものである。今その内容に就て一々紹介することは出来ないが、彼が社會學的研究の第一の仕事とする資料の蒐集が極めて廣きに亘つてゐること、及び之を處理する上に於て動もすれば人の陷る早急なる結論の謬りを警戒してゐるのは、彼の研究の着實さを證するものと云ふべきである、例へば凡ての種族に絶対無制限の亂婚が行はれたる如く速斷するの謬りを指摘してゐるが如き（三十八頁、六十三頁）又一夫多妻が自然民族に廣く分

布せるの事實から、之を以て『自然の婚姻形式』と推論するの過誤を戒むるが如きこれである。（百九頁）文化を發展過程と見る彼は、全ての時代を通じて本來正當にして常態なる唯一の婚姻形式ありとするが如き考へ方を排し、從て又自然的婚姻形式なる表現の過りを説き（三十一頁、百九頁）殊に彼がその時代の文化程度、特に經濟狀態に最も適する婚姻形式が、その時代にあたつての『常態にして自然的』なることを説ける所は、歴史的實證的なる學問傾向に應ずるものであつて、マルクシズムに訓練されたる時代の人々に親しみ深き響を傳へるであらう。

自然民族に廣く見らるる婦人共有の諸形式が、富分配の不平等による有産者無産者の分割と共に賣淫の形式に變じた事を説くあたりは興味がある。（五十五頁）而て著者の道義心は、科學的論述の途中に於て無理ならぬ閃きを見せてゐる、曰く『文明人の買ふ所の愛、愛の如何なる動機によつても貴くされない女子の犠牲、買はれた寵愛、金の爲に堪へ忍ぶ抱擁、これ實に自然民族の、婚姻以前戀愛生活に千倍する醜き「文化の產物」である』（五十六頁）——文明の中に、彼はかくて、野蠻を認める、『我々の現今のカーニバル祭も亦この古代の、多分原始的春動期と關係

ある祭典の最後の弱められたる遺物と考へられる。』  
(六十三頁)

一夫一婦婚に就て著者は、これが低度の文化段階にも見出されることを實證し、ただそれが一般的傾向として表はれたるは、文明の段階に入つて後規則立つた結婚生活のうちに國家の強味の根柢を認識した國家の自覺に伴ふものなることを述べてゐる(百十三頁) 本稿の筆者は、此點に於て、國家自覺の時代即ち近世國家成立の當初、恰もビュリリタン精神の洗禮を受けて純潔なる性生活を體得したる英國人否、嚴格に云へば蘇格蘭人が、如何に資本主義國家の精英となり、經濟強國の基を拓いたかを聯想し來らざるを得ない。かのシユルチエグーバーニツツ教授は歐洲大陸人に比較して純潔なる英國人の性生活にアングロサクソン世界霸權の一要因を認めてゐるのである。

第三章を終るにあつてミユラー・リヤーは結論を述べる。人類は——少くとも發展の種々の段階に於いて——殆ど考へ得る全ての婚姻形式に生活することが出来る。我々は人類に動物の全ての種類より遙かに勝れた比較にならない程の變化能力、適應能力(文化能力)が存するを知るのである。(百十七頁)

第四及第五の兩章に於て著者は配偶者の數以外に婚姻の性質に對し規準的なる他の二點、すなはち其繼續期間及其嚴格さ(純潔)によつて更に婚姻の種類を分つてゐる。彼によれば次の四種類が區別出来る。

一、非繼續的且純潔なる婚姻、二、非繼續的なれど純潔な婚姻、三、繼續的なれど不純な婚姻、四、繼續的且純潔な婚姻。

婚姻の繼續性は文明に入つて初めて一般的現象となつた(百三十九頁)と説いてゐる著者は、文明と婚姻の純潔さとが如何なる關係にあるかに就ては述べてゐない。

第六章に於て著者は婚姻の諸形式に夫々定義を與へ且名稱を定め、如上の研究に結末を附してゐる。

家族の諸形式を取扱ふに當つて(第七章)著者は、先づ人類は、何れの文化段階に於ても、家族結合と社會結合の二種の集團形式に於て同時に生活してゐることを述べ、家族結合の形式として大家族と小家族とを區別する。(百六十頁、百六十一頁)

社會結合の原始的なる基礎として親族をあけ、(第八章)、著者は、その親族組織の根本形態たる氏族に就て興味ある十數頁を費してゐる。我等はその中に、氏族が攻守社會たると共に勞働並びに財産の共同社

會たりしことを學び、又、トーテム制と文身とが氏族員の聯鎖として働くことを知ることを出来る。

著者は次に氏族の縁組から、高等なる親族組織の諸形式が発生することを説き（百八十六頁以下）外婚の結果として、母權、父權、の問題に及び、フラトリの關係に言及する。（百八十九頁以下）最後にゲネオノミイ的性質にあらざる社會的結合として地域的結合を挙げ本章を終つてゐる。（百九十六頁）

以上私は極めて簡單に本書の構造を紹介した。その煩雜なる地名と種族名と間々ラテン原語を交ふる術語との集積をよく讀みこなして全譯の業を完成された譯者の勞を謝せねばならない。讀者が時に翻譯臭味を脱し切らぬ文章の一二に出會しても、それは譯者が原文の構造に忠實ならん事を望まれたからであること了解されたい。全文を通じて難解なる箇所は殆どなく平明簡潔なる文字の中に原文の意味を傳へてゐる。譯者が序文に述べらるゝ如く本書が我國婦人運動の人々に讀まるゝに至らん事を祈りつゝ筆を擱く。（内外出版印刷株式會社發行定價壹圓參拾錢）